



曾 4
775
194

田舎莊子序

大塊意氣其於名を風とす夫塊を
是とす以苟らも天地の間ふ生次る第曲
空々全そ大塊風来りのなりとて人
身と例て刻の席ふおぬとて次奇と怪に
に會者流ハ俗乃情也空とて多しむは
俗忠口あるも信少なりて其奇ふを疑
て道不ぞしめ口りうてそ味は
さく然て生と樂し師めハ如何しんふ
日何り田舎莊子其書あり書林果菜



了々梓尔世首に存やううふ紙と云て
 可うけく我生世樂と云也何
 也辞せ身也や其書ある何そかの味を
 其起る能空言刺以前うまぬの奇能
 其さうたふううう生と云ふ一函一巻を
 少くも存るうううま子なり耶
 少法添(園)の筆一平假名の文と云々

享保丁未年九月日

劉山郭



田百川書



田舎莊子卷上

目録
 雀蝶變化
 木兔自得
 蚊蛇疑問
 鷓鴣論道
 鷓鴣得失
 鷓鴣巧拙

田舎壯子巻上

雀蝶變化

東住士

伏齋標山安選

大正二年一月廿四日
中村楯雄氏贈



雀蝶小湯て云々の信性とこれと菜菜也此むい
 鳥よまらび白中よりけまるる本もなるとあり
 菜の系よりけり養々としてありん今
 此て蝶こりたときつ縁者と近ひ死の自
 在の身よりなうぬむうに此れ其樂いとい
 ども今我小湯のうらむも相ありはるりそ
 へのしにむあうく然るも我九月を海水よ
 うと捨くすれいふ風ありけ捨成るる目見
 となく手はるる甲とつりくおりく我と
 此と何と信とまきとまきと此れ此れと水也

なりて後々今の産の心を治しなかりとあつ
る路の心なるを極きし中中気家として
寒さ半もしく持ひまうしく相意とせぬとる
くむ形愛されぬ氣より愛されぬ理の常也
理の氣象なく氣中よ存せ既ん産の形あり産の
氣あり産の理存い又胎の氣有り胎に氣あり胎に
胎の理存い胎の心いを形は後ふとの形滅する時ハ
は形れ心外むり老丈あると懐胎なるは且胎
二年く念仏とすめられ老丈眼とひるさ
百地をよりせしとす一陽を打て極と流す
とありんやと云坊主の云方一ありうり時ハく志
たりん惟理とまげく念仏と中めくと老丈眼と

擲てたしひ生とをれやひふとあるとすく
かしくくは坊を母の胎中一と一付の半とを
ありするく対するやうに付くくくぞ流す
くと云坊主眼と云流すア是と云くく老丈眼
く方を愛ふくくく老丈眼と云くくく時
の半流す愛くくものりくゆくと遠く産生
流半流す愛くく者ありむやありくは後又行よ
生とくく今的心を地くくあり 然ふたりとも
氣ふたりこと其生流する物ありなりく老丈
と云んは一生の産のくくくその心未だも
亦一生流り是も亦産のくくくぞありん然り
と生瓜浦くくともぬ半と今より岩盤かすゆも

愚癡也只死ぬとかりひく死ぬるが満下の一合も凡
是即成此也とて坊々いふはくして返ぬ合者
病多化してうかきくたり痛草化して量と
竹の法と覆と重しに向く同一何ぞ意死く
腐竹の心とらんや意氣腐草又何の蝶敷ら
あらんや陰陽のつらうく形化うくを氣化
の内化速く初止治法の用はるん生氣をこれ
と離る是と死といぬは形よ生氣あるぬふ意怒
好想れんありい形死く浮き生氣をぬ何より
こころ心抄らんや火乃熾なるも窮よつとて燃る
也新其ら時を火とあつと減を燃想わと
つとて之と半一終るんは火熾とていふも

又合名の中よりぬく火程持る改小減きり火又
在るの中へかたりくはあらんは火熾減とていふ
説のそまき取あす

木鬼自得

有る魁と謂く云はとらんふ其形おうけして
凡そつとふちいふは滯あり既中然以者そん
るを小人得の天物なぞたつとてをなる眼を
かき全あさめらうにして白梅とて思はれ
うあつとて法名のいふ笑られ水をや梅の
うらふくみ辰寝をけきる小をとりて咳あめ
ぼくまへこれふもとり種木は向くとも木とて
ありむらり時をさくやうらけ法名の

と那く雁鴨のびくく人よ美味せし海ものよもあはれ
まぐり末りて我とともゆる者もれくなまくほく
まりく北人我取らへて権本につかざらふるま
見獲くまぐりいさりも我よ玄教あられとゆきそ
そらももあはれ又まじりていさりもふゆはすらも
ゆる小きさあつあつそらんまゆ先示世ふつ
なり不肖多れは北よりそかろうとは氣をそと取
て我よ捨たしを獲て我骨をすくそ合よほくそ
まていゆぬ時を胸とたれ返れしてやうく返也
ゆるい生を付乳高く名おけ奇澤も感感をかりり
ゆるきなり大名高家の若もは法の池をも
ゆるもなる然とても即ちゆりもと投の若る

我らもまふく一投ゆりて合く我が物もなり大
きよと合してはやとすればきこくこれ不切者か
海道の若もよてきおひくは胸とほく非業の
死とせらる半もあり思業とけきまそとやに
つるかぎく半は我とあり半は此く一石のまありた
けく半合き香合とゆくま前法合員結構よ
師もく麻のくまを貴人も位れ破蓋とゆり其
すかみ誠懐くゆくと泥の中へぬこまらるま其
とこれに若得各別なれども木の生と成らるま
はれり一ちるぎん坊とふ鳥あり種と憐まそと
云ぬ瓜うらふそ取らるるま若くは若もま
ぬあり尾を翅ゆりまを平泉水角の鳥の合所

ゆり〜〜とておはつぬだ〜の空六眼〜ふ〜ふ
〜水〜無〜以〜る〜程のぬあり〜存〜く〜類〜と〜ふ
〜の〜を〜し〜け〜く〜氣〜ま〜さ〜る〜る〜
〜の〜清〜法〜を〜類
〜と〜あ〜う〜も〜そ〜れ〜ゆ〜ら〜も〜
〜酒〜法〜之〜類〜も〜尾
〜と〜法〜を〜是〜故〜不〜覺〜く〜ゆ〜の〜と〜し〜ふ〜ゆ〜と〜取
〜破〜く〜心〜持〜〜〜〜
〜早〜入〜意〜の〜都〜は〜入〜き〜る〜た〜は〜
〜法〜を〜疑〜く〜ゆ〜ゆ〜〜〜
〜思〜前〜生〜れ〜宿〜因〜は〜ゆ〜
〜何〜乃〜而〜年〜々〜と〜ふ〜の〜次〜、〜我〜不〜復〜な〜る〜半〜之〜精〜り
〜云〜我〜と〜以〜と〜知〜ん〜ぬ〜我〜れ〜も〜其〜実〜は〜〜人〜也〜亦〜若
〜瓜〜與〜瓜〜と〜老〜子〜は〜、〜是〜れ〜を〜り〜捨〜つ〜と〜我〜は〜お〜う〜き〜半
〜も〜〜〜小〜さ〜の〜笑〜ふ〜と〜〜〜
〜我〜は〜は〜は〜と〜な〜る〜
〜も〜あ〜〜〜四〜十〜八〜萬〜の〜都〜は〜入〜ら〜ふ〜と〜我〜好〜と〜や〜

〜も〜あ〜〜〜小〜さ〜と〜し〜擲〜く〜〜ふ〜ゆ〜ふ〜會〜の〜名〜と
〜結〜する〜な〜故〜〜〜
〜志〜あ〜〜〜
〜我〜解〜ん〜と〜し〜不〜の〜半〜を
〜も〜如〜〜
〜我〜と〜し〜ゆ〜り〜者〜を〜我〜と〜考〜ふ〜也〜人〜は〜若〜ら〜〜も〜の
〜と〜乃〜つ〜〜其〜法〜は〜あ〜る〜我〜亦〜か〜〜恩〜を〜被〜す
〜我〜半〜ゆ〜〜

蛇虵疑問

蛇虵は同〜云我百足以用ひ〜ゆけ〜も〜行〜早〜と〜半
能〜人〜は〜遊〜く〜時〜は〜翅〜と〜れ〜と〜あり〜ふ〜時〜あり〜ゆ〜と〜
れ〜は〜是〜と〜さ〜〜〜の〜ち〜ゆ〜
〜半〜を〜さ〜〜と〜ふ
自〜由〜を〜〜人〜何〜の〜難〜と〜い〜は〜は〜
〜と〜あ〜〜〜や〜蛇〜云〜我〜何〜の〜術〜と〜あ〜〜人〜也〜と〜い〜

ろのむふ所へ以てさし向ふるをみみくやくと
なりゆめなるふお母の足と動してゆくや半
おろくして心をさしむ行の術といふかめのと
く可成くの足と海とぬぐにをさぶゆくや蛇
之我むらうく小心をくお母の足とほふまあ
らぬ一様初る前即百足初く力とのせくゆく文
よのせりき半あり別は何れ術をう用むとふ
別儀よくく敬して云友人に我がゆるる可はぬ
ららあはれもことと推く彼をわきと能く口書
六段と謀る者共廣大高唱の理皆紙がんの注
解なりとくはみくぬ故小書とくもことくん紙解り
能く只字足しする文字の別語をりふくは心

此飛遊はくか入るるをみみくやくと蛇の足なるを
地の足なるはたよ遊化の力をあましく我もあま
ゆるぬふ蛇足か同化とくも苦方よもせぬ蛇足
かたきくも不自由なりたおりの今彼等紙福
ちく相去乃題とくも月小着さん六花半の
寸なるのくあはれやまふめく結ぶなるは
鶴の腹のきくも蛇の足の強さく共は蛇の長
こころとく蛇の腹成りたかとも切て痛て死を
殺してとく蛇の足と能くも結たてく若くして志
くく立てなるまぐは足の拾好たすくたて共
身はくはせごとく用はるる結りた死人
て着の用あるとくはく共用の自然もく

牛と云ふはうづらある牛をわづらひて造化をなすを
多しと云ふ牛をうづらひて故小種々の私智を覚成
用く日と造化の神理に違ふ所は丈夫と棟も
のあり水は遊ぐ者あり所は所すとのあり空
住じものあり大と橋と回く口足あり橋なく
亦より大を上にたし能く馬を牽きさそを履て
をさへゆけ糸結のく糸とさそり能くさそ
皆とありさそくくもさそくく必新なるもあは天
よく受ぬふの性也蛇と蛇と性異しとて形亦異
うと蛇を既く足あり地のみありとてのありあ
くの術とありんばと牛のけぞ蛇は八足なり蛇
の百足をばふ術とさそくも可用可なり蛇も亦

牛と云ふはうづらある牛をわづらひて造化をなすを
多しと云ふ牛をうづらひて故小種々の私智を覚成
用く日と造化の神理に違ふ所は丈夫と棟も
のあり水は遊ぐ者あり所は所すとのあり空
住じものあり大と橋と回く口足あり橋なく
亦より大を上にたし能く馬を牽きさそを履て
をさへゆけ糸結のく糸とさそり能くさそ
皆とありさそくくもさそくく必新なるもあは天
よく受ぬふの性也蛇と蛇と性異しとて形亦異
うと蛇を既く足あり地のみありとてのありあ
くの術とありんばと牛のけぞ蛇は八足なり蛇
の百足をばふ術とさそくも可用可なり蛇も亦

消久吉山福福ハ造化の令也造化の令也可豈私以
まぬりく半とひひや只造物者小方とほそく流原
私と容りく半の記者をと道の大名と知るとふ

鷗遊論道

龜鶴お祝しけけの終了 鯨鯨きふありて款々
日なりぬ一元の氣運物して造化の癖りたる
とや万物を同生しく成るしく敗る半あり
榮る半をわくうふれ半あり異る物あり同れ
とのた死ぬるの遊との知くとの静なるもの文
うめくそ乃がいかことをたの皆自然の如し其
始をうらうそ未だいふてもくびいそを
ごごゆき行なるといふてもこれ自然も亦

物の教よつうなりく造化の中は皆ぶよの物
よちして色とんをとも空風杖もそそけ物
ふんた天下と乃さより貴きことのみ一誰一人
もなし天下ふくんや又天地よりく色とて
を大鵬の扶搖は羽うつて九万里小上る小大座
の二物の況や亀鶴の子多百年の壽はつとも
命教をくたする日た我等も同半之我等朝
ふせましく然もたれくとも我ふそハ一生と
をあり西百所をいり母めくふ鳥鶴を言ふ
それ海中の游鷗氷とすて云有相の今より
海をぬのせざるもの半ありなり四大御給して
は男くけり忽も来り忽も去る何ぞ定まる不あむ

若やうらされば染染世尊初け八百若身も随ふた然
んよあつまる只風響ひ瓜は避はくは湖う又ま平へ燃んくは世
乃吾恩と悔ふるんく用は生は涯はと送はくんくは
取りくまなれく云は蝶た蝶た云は万ま物ぶをうけて女
よ帰りたるのを誰も知る半く然どもは取と受と
生れ出しよると死するますのるもハ物あれハ則あると
とくい飛ませての鏡かあり其賊小取くて中小
於ふよの瓜君子といふて織とつとのれてと取よ
私をる老瓜小人といぬと娘といふ事ありさりお
りらるさりたくさ事法徳徳福福縁縁枯枯益益甚甚も取り
まく法法とせくる造物者といふ親父のありく
ひをるやぬ水ふらうひて用まさるハぬのもえるハい

然り命の短きも然り命生まるも何んだ皆かの親父の
吾が圖ち之を絶たたかのおやら宣めぬわれれと私をよくく
て也初初とんや皆とのありく受るハ此れ氣教の
自然といて智ららうも白なく私もあるさる也
天のつくて法と私をくくて交るる身あれば又
高つくて送はの半と抱びなくくて法とさ事送
法の瓜私勿も是瓜母の瓜が猪子ふらん半とりと
まくて目と智ららうも白なく私もあるさる也
乃の取半ハつららふハ瓜子するのもあるハ存の心志
卵ふ子らぐみハ本とくてなれぬハある者也は理不
々々記者たりく巧とくまある半あれば是と
帝といひく私智也足小自滿と説くて生涯

いささ

とらうしむのり

鴨鶴得夫

鴨小多たとあるゆへに謂く白海等知の作地つ
以又を庭の菓以給ふつとあると一とて友を
呼さるくふらとく人其ある葉を以給く綱を
より結を是也我冬ふなり山を舎物あり時公を
よまうて縁先ふある南天の實と喰いた亭に
る本れ一ありかりふまよ由るを公を
てれ候しとてかよ也万一結よりうてもお一も
さるる力とすくめくそのあとのけもなりて
あらしう居とハとこハらよあつと力をり下は落
時一もとておとていし一也等ハ結ふつとてさる

あらしうとてはとてあしぬ小想も力も熱とけり付て物
くもあらしとてさるる人うく不測法の知るごとく
かよ一にの末所より鶴結とくふふある笑てそ人を
多るもかよとて一とていしふあひある者を下
もも細きことと五例のしとておとそりて下は落
まバ下なることとせあるる付かりひとぬ味なれ
そよとの鴨飯とありとて味なれおふ地味も結は
ぬりともいしとて味は同とて世間小物の人
か務の小とてさのこも覚え用ひとて一旦あるとせ
まら半あれハ自満とていしとあつとけり天
下此人豈皆あるらんや人の巧技を知りて
とらうより今との覚えれ巧技のさるるなり

却て仇く如く禍とまほく半成るるむむし唐
みく吳王はと海く想山よ上る想も人をと見く
友礼して四方に近ぬす中ふ一つの想をく近うん
木の枝よ光ほるふく物とらうのむらとくを
巧とありて人成偏る吳王夫とつらく射れ
中と夫とともく物と揃ふがごとく吳王道後ふ
命とて四方より一なる夫と放しむ想はふあ
らふれは意これし能く射殺すことさうあ
む智く伐て禍とまほく者皆かくれ
鷺鳥巧拙
鷺と鳥とたふ鳥が云ゆ瓜らふ老く想あは付
そ守実ふなるうくありとたふ老く瓜らふ

取とらめくむしさうふまくと店もふ時つり
あはなふふらうりくくし腹のそくは然とむ
あはなふそく宿法ありく世間ふ知事く
つら儀ハ世より始りし世におわく何の能くある
我ハ人家よ由事あれは往く未然ふ若くしむ
然ふ人く奇特也とくはく却るのれは
りたふくしそ我と不詳の物とて忘懐ふ
是をくつらぬ事ハ那くしつら驚く云ゆ人ハ
若れく恩ふさす人ハ鳥にたあきと
やうも共よ非也彼と夫其徳をくそ実
あく人と正一人の非と若く時をく者信
却く我とくしうく忘懐ふ人の情ハ

常と云ふ氣と云ふんとして人家の屋根と
むすり相は前付柱付の物成つてきあつて
人此秘苑する樹木の葉をぬすて何あり其
人の乾しておく物成を急もあつてう喰て
人よあくすう一平のちもさなく声なき聲も
よもさやう海しく人此やうさむ也汝の人
と函と告るといふと其使あり其実なき若れ
よはあつて氣小感して喜蛙の鳴く
汝の味あふ木本の味ありよもあつて只汝不祥
乃氣あるあふ人家よ不祥の半あれを汝
そ氣小感してさあつて樂あり味のも也色回
声お急し同氣相来るといふなり何ぞ色を以て

人よ思あつてやせんや人よ不祥の事物とおも
つてや死して汝のこふかきつて人と云はれぬ
小不祥の事ある者もあつて好く人の心は
成ふもの也故よそいふ所を是なりといふも
人色を急しくおむ我う不用法なれ天候あり
分を致しく女是は用する者必福と振る流
と物のまじき氣を為す水成飲むといふなり我
只汝の命を急しく一生思あつて其天
時う急しくおむと云ふなり其天
死なりぬ

田舎莊子卷上終

田舎莊子卷中

目錄

策瓜夢魂
蠶之神道
古寺幽靈
蟬蛻至樂
會神夢會

田舎莊子卷中

菜瓜夢魂

東居士 佚齋楞山亭選

東國北鄙小負山とてふ者あり友と訪く隣々小臥う故
 りまふ淇川のほとりと遊くはと七月十六日月よ
 素しくそこら今ん何やん怪しき物流
 するきてる金と菜瓜の瓜瓜り索麩と糶
 して是や盆中精靈棚に祭り捨たる物なり
 やあまそとこもくんふん威くる半あや負山
 おりてく世間皆くこのまはく其れを奉て用
 らるし今日も弁らぬかたりと人形と
 うふんをわたりふしく用らる時威勢と物らひ傍
 り人なればとく取りひ存らる時怒りいり

指胸以こころい馬戲抱をうとつとも我河で感か

索麪乾韃麻骨痛 菜瓜美兮用成驄 今漂淤沉溝洫中

又作祭文吊之 為尔形不 以尔質果 生葉深山 誰得有知 般蔓圃園 非天非人 前喜後憂

一用韵成驄 不久見穿 結實僻地 辱亦不至 見文招事 自受之書 始肥終悴

暫感盛衰

獨漂涕淚

書終つゝ菜瓜と抱して寝る末又菜瓜ま
々々々みよ立々々々其方が所を世間名利の
俗事之我々造化の中は生じて造化の中は
汝等下は腐爛の如くあよあよび夫天の物
生ずるはそれく乃形よあましく世に
あり亦まては家をばり器以割れ竹ま
まのこころは花とつらり去るは物と府極
子ては産と
雲アアアアアアアアアアアアアアアア
とととととととととととととととととと
又アアアアアアアアアアアアアアアア
世々々々山々々々初生の時々々

朴^く朴^くといふ者ありい^い圃^ほ靈^り社^やを^とて^て詣^まる^る不^た汚^ら
忌^いま^き衣^い裳^しき^きる^る男^お拜^い殿^んよ^ひを^して^て何^なや^らん
ま^まら^らく^くや^やい^いぬ^ぬ肝^{かん}膽^{たん}と^と禪^{ぜん}と^とて^て祈^{いの}ら^らる^る家^け
不^たい^い堂^{どう}の^の方^{かた}ら^らく^くま^まを^をこ^こう^うと^とい^い本^{ほん}郷^{きやう}ぬ^のこ^こあ
ら^らひ^ひと^とし^して^て不^たい^いつ^つと^との^のあ^あら^らき^きる^る瓜^う着^{ちやく}し^し多^たり
ぬ^ぬら^らう^うと^とし^して^て見^みら^らる^るき^きお^おら^らる^る多^たり^り彼^か男^お小^こ
同^{どう}く^く白^{はく}ゆ^ゆ何^{なに}の^のま^まを^をば^ば其^{その}つ^つか^かま^まき^きよ^よう^うく^く
し^して^て目^めは^はひ^ひよ^よの^の常^{じやう}々^々と^とび^びを^を相^あと^とう^う不^た欲^{よく}
ら^らる^る者^{もの}し^しゆ^ゆら^らる^ると^とい^い何^{なに}半^{はん}と^とい^いつ^つそ^そし^して^てい^いふ
彼^か男^おを^をく^く曰^{いは}ら^らう^うと^とや^やあ^あら^らる^るも^もん^んと^とい^いふ^ふ物^{もの}れ
我^{われ}を^を氣^きの^の年^{ねん}終^{しゆう}ら^らり^りの^のこ^こに^に我^{われ}を^を性^{じやう}為^ゐぬ^ぬと^とい^い物^{もの}れ
梁^{りやう}と^とい^いら^ら半^{はん}人^{にん}の^の陸^{りく}地^ちと^とい^いく^くと^とい^いう^うと^とい^いや^やと^とい^い照^{しやう}

強^{じやう}く^く固^こく^く故^こく^く向^{かう}ふ^ふ不^た合^{がふ}な^なう^うと^とい^いぬ^ぬと^とい^いく^く我^{われ}が^がお
ら^らふ^ふ不^たい^いゆ^ゆを^をく^くし^して^てお^おら^らる^る食^{じき}物^{ぶつ}よ^よま^まら^らひ^ひを^をれ^れを^を
物^{もの}と^とい^いふ^ふ不^た合^{がふ}と^とい^いふ^ふと^とい^いぬ^ぬ自^じ由^{ゆう}の^のあ^あら^られ^れも
物^{もの}と^とい^いふ^ふ曲^{まが}の^の家^けに^に人^{にん}を^を居^ゐる^るに^にあ^あら^らひ^ひと^とい^いふ^ふ害^{がい}ま
あ^あら^らる^るに^に不^た明^{めい}佛^{ぶつ}陀^だの^の威^い力^{りき}と^とい^いふ^ふ世^せ界^{かい}の^の物^{もの}と^とい^いふ^ふ
小^{せう}説^{せつ}教^{きやう}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ祈^{いの}と^とい^いふ^ふ物^{もの}と^とい^いふ^ふ世^せ界^{かい}の^の物^{もの}と^とい^いふ^ふ
て^て何^{なに}の^の重^{じゆう}寶^{ぼう}と^とい^いふ^ふ先^{せん}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ暗^{あん}の^のじ^じよ^よの^の
と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ人^{にん}の^の秘^ひを^をあ^あら^らる^る同^{どう}く^くを^をい^いふ^ふ説^{せつ}教^{きやう}と^とい^いふ^ふ圓^{えん}行^{ぎやう}
裏^{うら}に^に色^{しき}へ^へ盡^{じん}ん^んと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ物^{もの}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ物^{もの}と^とい^いふ^ふ
人^{にん}と^とい^いふ^ふ害^{がい}を^を禍^{わざはひ}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ益^{えき}を^をれ^れ物^{もの}と^とい^いふ^ふ我^{われ}が^が祈^{いの}ら^らる^ると^と
し^して^て欲^{よく}は^はら^らる^ると^とい^いふ^ふも^もあ^あら^らる^る身^みの^の害^{がい}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ物^{もの}と^とい^いふ^ふ
不^た欲^{よく}と^とい^いふ^ふ也^{なり}老^{らう}人^{にん}を^をい^いふ^ふ人^{にん}を^を何^{なに}に^に立^たぬ^ぬま^まり^りて

各情しゆぞと云々若ら昔くいし我の縁の下に
暮る紙せよわいつく何のやとわ一人家へ害成
かきひし人に少くまじく車一音く茶碗きこは
人上野もせでらうく奉りね一頁合紙ゆよれ益合
すづきんをたうりか書懸まこは縁の下に居る紙か
もよけあり小虫紙挿て喰ひしうく一生車寄紙行
のらきみくく神くうんゆと害するとのやれ
猫とふくじきふくうりやとれもよくおられよと
こよめがうりてく猫くふとのせよおれくや益の物
也然とこもゆと挿紙の葉あれあうりく益合と
ゆりくく人く乞と個をうり人く猫とをくするまあり
はゆとくくじよの甚くきゆくやめ猫の世も益

り紙半紙ゆくゆりせよ書あれ紙ゆり小人の心
暗かくばくく一人天性悦ぶありて後と書とゆ
乃くどちれまうりく書とよの文とれくひ合
物く娘めく一人ゆり山なりまけくそか人の心
あきくくゆりあよゆきり物くゆひく喰ひ
紙ゆとにくひくゆんどうりゆり猫と個あらんや
一人あくの園とゆり一人のゆり所へいゆくと
紙ゆり一人は害とゆり車とすくあり人よあく
まじく半も今かよふかゆゆり自慢の齒ぬよ
一人はゆりゆりまゆり猫と個まゆりゆり紙と
まじく水くもとゆり一人の又八都く身の猫と
ゆり半八ゆの園とゆりまゆりゆり猫とわくむく

なりぬ半紙津水のしんをきく今よりんと改めく
人家より客となりて半紙くハ世界より空の橋を同
しきなりぬ海の方を令くすり半紙と改むる
ゆめしきかきしん人々紙力をハ紙表とて人々をこ
ごめ力よりなきるハ神のしんをけし小人の
常なり神を紙表と不變とてまじけり半紙
ありしゆのれい吾思ふ正しきふりしん人の心
にうつすれ物なり夫神のしんをけし先紙
人の紙歌赤念とてとてとてとてとてとてと
同紙浄とてとてとてとてとてとてとてと
紙しき物と不念力の深紙紙とてとてと
とてとてとてとてとてとてとてとてと

何事し紙のしんにまじりてとてとてとてとてと
うりしも不敬のしん紙のしんをけしとてと
の徳と感化しとてとてとてとてとてと
ん無執しとてとてとてとてとてとてと
生るはん昂神のしんをけしとてとてと
不万福れ意をりしとてとてとてとてと
神のしんをけしとてとてとてとてとてと
つりしとてとてとてとてとてとてと
坊用えは乃正神のしんをけしとてと
同氣お水系の道徳とてとてとてと
事念をけしとてとてとてとてとてと
紙の心静しとてとてとてとてとてと

沙々威しうのささるる堂私心とみくく邪ときくけりらむや

古寺幽霊

負山とふ者あり友と誘ひく山寺に移る寺傍一つの
右墳と移りて云はししに何れも此墓なりといふ人々
高野威と京國に振ひ武と列國に輝く人々
今八橋墓とみくく市ぬ人もわく負山と云はれずは
うり多かれ中京の氣華忽く一帯の友とわく
の枯骨泥り子載の祀と享じや人世の祀に
まぐくかあしし市筆と河一紙と賦して靈前塵
春華開處山如錦秋葉落時野起塵
人世榮耀澤是夢古碑猶殘客泊巾
拜して、すくおりくさむく墳の後より怪しむのあら

いさむら推夫もあゝ農夫ももるんぞ發と夜と夜
とあぐく二人と招く云は等何ぞ詩と依く我れ
成にたりやや汝等生人の情とわくあふ冥冥
の半と識るすふらふく半の合点いゆくま
きれたゆ等ふ泣くくびたたり我れ生の内大因
あゝ願却く人よりくもやこれ道ふも前とふ
うらるるあゝびくおと証する付に合鉄の高き前塔
と守復く句所おやうとぞくし本れ入く
回く何より付を女像舟士を習ふ何ぞ古今の
本と論していさむらく狂歌の声い年と依りめ
茶色の美お目と依りめ胃女の使冷風流れ嵐
八坂の浪味一つくくくまろくはく半くく下下れた

のしむるくくをよめれあしりて今生れつさ
命はくしむるくくをよめれあしりて今生れつさ
と不履くくをよめれあしりて今生れつさ
其の苦きかとおくくくく民と治むるくくくく
其の治れくくあつて寸風俗の更悪くくくく物
と是非とあつてくくくくくくくくくくくく
世々くくくくくくくくくくくくくくくくく
よけくくくくくくくくくくくくくくくくく
事人なれ末とくくくくくくくくくくくくく
存七子孫の業守る民の綱若くくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
此甚惑るくくくくくくくくくくくくくく

一云のまきくくくくくくくくくくくくく
然くくくくくくくくくくくくくくくくく
もす半能くくくくくくくくくくくくく
況や天比の運命は造物者是とつてくくく
此まくくくくくくくくくくくくくくくく
是又造れ申れ一級人也永くくくくくくく
が物とくくくくくくくくくくくくくくく
づくくくくくくくくくくくくくくくく
奪ふ時を待てくくくくくくくくくくく
此が子孫とくくくくくくくくくくくく
所くくくくくくくくくくくくくくくく
何くくくくくくくくくくくくくくくく

も造物者より一毫も此の執着すべ
くもそのものも造物者我々も縁と因と興ふべんを
あつた奪つらんハ奪はむて賞罰ハ造物者より得るを
りの今世と我々も世と隔つたはぶるは乃腐儒我々
ふ取ははせし只生死の境の一断たりと我々も縁
微より者隠微より一而一法と賦して去る
生前元寂寞 死後自無為
閑者人間世 榮枯一局碁

蟬蛻至樂

蟬樹上よりとりてを蛻と謂く曰吾も此より一
作すて去中にあり今これ世に離して松葉を

次はとけし樂しあり我れとてくみく移るあ
らば然とも我れとてか何ともまら半能はれ我れを
か我れとてえん我れれの情状をて毎に思はれ
つゝ我れ白ゆ甚感つり天地のる物れ命あり知
力の及ぶあふあゝ其上は羽をて生し我れと
吟して樂とていともありひしん鳥の身とて喰て
じとをあるい樂あれは我れ此憂あれ半
世の中乃常なり今吾精神氣血とも小ゆ小ゆ
づり大隙はあけくも我れ樂むのく又何とら
水めん生とたふらん死とてくまき吉山涼海
つゝ我れとて我れ風とて風とて風とて
ひありく風とて我れ又やじ地とてくふとれ

形をふもく思つても痛くらくらくいひ半れ
くれと天下憂れりかくむくもく王公の
而貴しかりたりふきくは其美は紙分れぬ
し苦樂は失のさるぬをさる佛の寂滅
為樂とふもの然して滅たし揮て云ゆを
御し解脫の人有り紙病紙勝く世も水の如
くもくもくもくもくもくもくもくもくもく
人世もくもくもくもくもくもくもくもくもく
然もくもくもくもくもくもくもくもくもく
て紙の中もくもくもくもくもくもくもくもくもく
てふもくもくもくもくもくもくもくもくもく
そ方の不及び瓜のりひんを知の不能る瓜憂者

愚の身も也只物とありそりあふふもくもくもくもく
意客も半々此財を天下に或樂とけく物なき
ぬふもくもくもくもくもくもくもくもくもく
けをて御と安じどろの竹のひりりき果るあむ

貪神夢會

貪神夢會
貪は常小大黒天と
作福と祈りもくもくもくもくもくもくもくもくもく
いづくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
らや憎む皮文の物あり今浪の泡子がくけ
行くれ酒肴を酒一筆三本線圓ひ并胃女の意志
とあつめを世真にたり又儀とるもくもくもくもく
あくやせゆもくもくもくもくもくもくもくもくもく

わらふも豆腐のやうなほろけの味にさう
笑ふやうな中より名人と云ふもさうさ
う思ひのほろけと云ふは流石さうさ
腹をちくく喫ひ又二三日のやうな物と云ふ
づふふやうな音は中づくと云ふ何と云ふ
やうなやうな却ら七海津の遊具さうさ
さうさやうな海津やうな遊具さうさ
ては力いかに人々を従はせしむるさうさ
七海津の美と云ふは流石さうさ
くさくさ真と云ふは流石さうさ
胃ともさうさやうな物れさうさ
と云ふやうな遊具さうさ

相成りとも道に進むと云ふは流石の也我々の貪念は
吾行そ彼福津まらう半あるや彼と我と皆命
あるのやうな彼等ハ天子ハ大名も亦有
の所人々も親しく行くの氣遣と云ふは
くさくさ親しく云ふは流石の也
少くは粟文汁油孔しん顔潤子寒原憲を
と云ふは流石の也
樂と云ふは流石の也
くさくさ貪念は流石の也
おのぬやうな貪念は命分といふは
はくさく七海津さうな遊具は流石
有るやうな遊具は命分といふは

七百中ふりぬ事一の^{あつ}小豆版らるれ抜くゆふ影
親しむをあらわす群^{あひ}からう恨^{あや}鬼^{あや}のやうなる貧乏
津なく已等しおらうみく海まとうりけきるまあは
これゆのせとひらけく腋のうらちと回^{あや}たしきゆふ志
ともなれどこそげたして退く者あはしお教
ふては悲^{あや}ぬりのく是を乳^{あや}教^{あや}の命とも然とも
ゆひにひ^{あや}知^{あや}く^{あや}く^{あや}激^{あや}し^{あや}貧^{あや}窮^{あや}の中ま序くう
て楽と^{あや}う^{あや}を^{あや}ら^{あや}ん^{あや}は^{あや}似^{あや}貧^{あや}乞^{あや}津^{あや}た^{あや}ゆ^{あや}し^{あや}た^{あや}楽^{あや}し
て七福津^{あや}の^{あや}砂^{あや}半^{あや}の^{あや}う^{あや}き^{あや}く^{あや}ま^{あや}れ^{あや}く^{あや}一^{あや}葉^{あや}文^{あや}津^{あや}中^{あや}顔^{あや}ふ
因^{あや}子^{あや}原^{あや}豪^{あや}を^{あや}し^{あや}親^{あや}し^{あや}能^{あや}く^{あや}化^{あや}して^{あや}今^{あや}も^{あや}共^{あや}樂^{あや}と^{あや}ふ^{あや}失
くく^{あや}入^{あや}股^{あや}と^{あや}抽^{あや}く^{あや}思^{あや}ひ^{あや}あ^{あや}そ^{あや}ふ^{あや}海^{あや}休^{あや}物^{あや}く^{あや}口^{あや}減
く^{あや}能^{あや}は^{あや}沖^{あや}可^{あや}一^{あや}也^{あや}給^{あや}た^{あや}然^{あや}を^{あや}樂^{あや}し^{あや}て^{あや}ひ^{あや}ら^{あや}ん^{あや}た^{あや}る^{あや}

これら成^{あや}る^{あや}り^{あや}の^{あや}貧^{あや}津^{あや}の^{あや}々^{あや}者^{あや}西^{あや}陽^{あや}の^{あや}白^{あや}至^{あや}矣^{あや}興^{あや}心^{あや}
樂^{あや}不^{あや}以^{あや}の^{あや}兼^{あや}者^{あや}多^{あや}と^{あや}う^{あや}何^{あや}と^{あや}う^{あや}正^{あや}矣^{あや}と^{あや}い^{あや}ふ^{あや}力^{あや}而^{あや}矣^{あや}
序^{あや}く^{あや}今^{あや}任^{あや}物^{あや}而^{あや}實^{あや}く^{あや}る^{あや}夜^{あや}合^{あや}矣^{あや}と^{あや}そ^{あや}く^{あや}上^{あや}の^{あや}恩^{あや}焉^{あや}あ
つ^{あや}て^{あや}一^{あや}種^{あや}強^{あや}と^{あや}て^{あや}共^{あや}歎^{あや}る^{あや}未^{あや}達^{あや}と^{あや}い^{あや}ふ^{あや}と^{あや}れ
と^{あや}人^{あや}信^{あや}の^{あや}業^{あや}と^{あや}下^{あや}る^{あや}と^{あや}く^{あや}世^{あや}乃^{あや}の^{あや}羨^{あや}び^{あや}を^{あや}行^{あや}
と^{あや}う^{あや}正^{あや}矣^{あや}と^{あや}い^{あや}ふ^{あや}歎^{あや}と^{あや}て^{あや}は^{あや}る^{あや}と^{あや}と^{あや}う^{あや}至^{あや}云^{あや}は^{あや}城
と^{あや}して^{あや}物^{あや}く^{あや}是^{あや}非^{あや}と^{あや}争^{あや}と^{あや}り^{あや}ん^{あや}然^{あや}心^{あや}の^{あや}不^{あや}然^{あや}と^{あや}切^{あや}く^{あや}生
死^{あや}禍^{あや}福^{あや}の^{あや}一^{あや}や^{あや}く^{あや}惑^{あや}と^{あや}る^{あや}は^{あや}せ^{あや}き^{あや}ふ^{あや}は^{あや}せ^{あや}く^{あや}一^{あや}た^{あや}と
そ^{あや}く^{あや}死^{あや}に^{あや}た^{あや}く^{あや}ぬ^{あや}を^{あや}く^{あや}そ^{あや}く^{あや}そ^{あや}て^{あや}一^{あや}年^{あや}と^{あや}お^{あや}ひ^{あや}す^{あや}富^{あや}を^{あや}と^{あや}う
や^{あや}ま^{あや}ら^{あや}貧^{あや}賤^{あや}と^{あや}い^{あや}ら^{あや}ん^{あや}喜^{あや}怒^{あや}好^{あや}悪^{あや}会^{あや}成^{あや}と^{あや}む^{あや}り^{あや}と^{あや}れ^{あや}く
吉^{あや}凶^{あや}榮^{あや}辱^{あや}と^{あや}あ^{あや}ふ^{あや}可^{あや}ら^{あや}ぬ^{あや}と^{あや}一^{あや}切^{あや}と^{あや}く^{あや}造^{あや}は^{あや}ゆ^{あや}す
と^{あや}持^{あや}ふ^{あや}と^{あや}も^{あや}元^{あや}下^{あや}れ^{あや}と^{あや}樂^{あや}と^{あや}う^{あや}吾^{あや}う^{あや}ん^{あや}公^{あや}に^{あや}く^{あや}之^{あや}下

あるが故なり。嘆息の富を福縁却て力の程格と
ゆる半一匹切く。此とくも。不交者多し
汗中。教子。陵。孔。門。の。顔。淵。因。子。寒。漆。漆。用。の。教
乞なり

田舎莊子卷之中終

田舎莊子卷下

目錄

莊シ右エ衛モ門シ傳シ
描シ之シ妙シ術シ

莊シ子シ大シ意シ

田舎莊子卷下

莊子右衛門傳

東住士

伏齋樗山寺選

招^{トカシマキ}招^{トカシマキ}二つとてうりうり^シ尊^{ウツク}純^{ユツク}とてく可^カ用^{ヨウ}の也^ヤ取^{トル}
 書^{シヤ}のまにまに^マ掩^{カシメ}中^{ナカ}々々^{カカ}好^キく書^{シヤ}と讀^{ヨミ}め^ル
 ころく^キあ^ウ文字とて^ブも^カ記^キ出^デせ^ルぬ極^{ツク}とて
 堂^{ドウ}子^シ臆^{ウツ}ら^カ也^ヤ俗^{ソク}令^{ノウ}と^モあ^ル付^{ツキ}八^{ハチ}俗^{ソク}人の^ト威^イと^モあ^ル
 て^テ樂^{ラク}し^テも^カ年^{ネン}を^シも^カぬれ^ルも^カ去^クるも^カん常^{ジョウ}不^フ樗^シ山^{サン}
 の^ノ下^カ泥^デ水^{スイ}れ^ルも^カ抄^{シウ}ぶも^カ姓^{シヤウ}名^{メイ}或^{ウチ}も^カ同^{ドウ}也^ヤと^モ唐^{テイ}云^{クニ}は^シ子^シガ
 た^タう^ウ行^{ユク}杖^{シヤウ}式^{シキ}と^モい^ハす日^{ニチ}が^カよ^クま^リきり^リ回^{カエ}の^ノ局^{クウ}に^テ生^ナま^ス
 あり^リて^テ一^{イツ}日^{ニチ}そ^ノの^ノ友^{トモ}莊^{シヤウ}子^シ也^ヤと^モい^ハす樗^シ山^{サン}
 あり^リて^テ一^{イツ}日^{ニチ}そ^ノの^ノ友^{トモ}莊^{シヤウ}子^シ也^ヤと^モい^ハす樗^シ山^{サン}
 あり^リて^テ一^{イツ}日^{ニチ}そ^ノの^ノ友^{トモ}莊^{シヤウ}子^シ也^ヤと^モい^ハす樗^シ山^{サン}

たはほづらぐさくつれもゆひのこなきがゆへに
罪とせらるゝもの悪事とありてあるあげて
何れ程の吾半もさへは縁と勝てて食を
そ信もあゝんぬれぬれぬれと信の
こりれ者也せしむるもことと類なる一ま
ゆらま筆下とせらるゝぬらんと書あはし
つとくそ実うしと半の一世と証人と感
の言ふあゝんぬれぬれと用の類とせしむるも
よむ今やんぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を
得く感ふ縁とせしむるもあゝんぬれぬれと
らぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を
とゆへにせらるゝぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を

忘らん
與
アラス
ハ

自黒くあんとする者なりしや且庄子が荒唐の
言ふ事と流るゝ聖人は勝てて人よ名とせし
只か小強弱ありやも多少ありぬれぬれ一丈
は勝てて且多病なり感依文法兼備せし
格敷中庸の君子ふらぬれぬれと知ありぬれ
人欲のあふは命に固有とせしぬれぬれ一貫道
へのつれとせしぬれぬれ何の教ありぬれぬれ
何の行と勝てぬれぬれ何の教ありぬれぬれ
此のろも八物各感する半ありぬれぬれ春とひく
ゆらま筆下とせらるゝぬらんと書あはし
つとくそ実うしと半の一世と証人と感
の言ふあゝんぬれぬれと用の類とせしむるも
よむ今やんぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を
得く感ふ縁とせしむるもあゝんぬれぬれと
らぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を
とゆへにせらるゝぬれぬれと聖人の教ふ所の縁と勝を

つきのとくも人の用ありとてさてもなるものなり
凡そ巧と事とする時を備りて流くやう白の足
却る害もある半は厚く色をぬくやうくもくもく
まきまき又虎毛の六指延ゆりおれり少く武術
を氣化とせふゆふ氣化凍りゆく今其氣詔
を延潤しゆく天候不充るがごとく故と脚下
強く先勝く化しゆく好進じ声不沙の脚骨
愈しく氣をなすもつけ変ふ意をなすもか
而して用ふるもくく可作とのつらう流ら
柳葉をとる氣を少くみおして毛とさるはふ
波流氣ありふ形をく流す速かき毛のありとので
や右物の云々の流流はるるは氣の勢ふ集めて

御くもの也我は特してさうて然り吾の吾の
とのあゝん我をさうて流むくすれは款も亦ふ
つゝ来るもやうなるんをなれるりのある時をいん
我流つて挫ぐんとすれは款もさうて覆つて見る
度少く度多しとされのありありとて豈我の
剛として款もか弱くもんや弱きと剛として天地
をうつるがごとく定むるものハ皆氣の象なり孟子は
浩然氣を似て実を異也彼ハ明と載せて剛健
也此を勢ふと剛とて別健なるも亦ふそ用未同一
くも江河の常流く一水浩水は勢よのこり且
氣化し流せは勢ものあり河をさうん宿氣却く
物化し流すも亦く彼ハ死し迫く打ちあへ

生気志欲と志を結成と云ふとせば力と合す其の
心か一故尔其志合決の心は志の望氣欲と云
勝以んや又云心は少年用と云う物なり久遠
云々如氣八旺なりと云ふも象あり象ありの微
といふとも云ふべし一氣以成連るも久し勢あり
物と不爭相和と云ふ不勝故に正時に和して彼
添氣の八旺勝と云ふ際と交ぬるも清氣なり
と云ふは氣と欲とん〜〜〜と云ふ者一は今日
此氣欲も度なり和して思ふは神の力なり我
らもよくそのあつと云ふは古物の云々の和と云ふは
自然の和ありあつと云ふは和の欲の流氣
と云ふと云ふはこれと云ふも念と云ふは欲の後

と云ふを察し和を以て氣濁く堪ふなりと云
てなる所の自然の感と物と云ふは自然の感と云ふと
云ふは用行世のあらはせんとや只云ふと云ふは
下と云ふは感小強く動く所の氣小象なり象
何と云ふは氣小欲と云ふはのり〜〜〜と云ふ各の
所はよくよく用の中なり〜〜〜と云ふは氣小
貫乃成なり不化の中に云々と念あり氣小
れ用と云ふはのり其氣詰進なる時に物なり
〜〜〜と云ふは〜〜〜と云ふは〜〜〜と云ふは
あつと云ふはよく折るとか〜〜〜と云ふは念
念ふと云ふは皆心なり〜〜〜のりなり〜〜〜
あふと云ふは心の散れ〜〜〜と云ふは欲の心あり

む多ふの結うりともあつて勝つてあつたり剣術の
相分る人あつては吾物として頑強をこつた何れに
心も形も一物に高しつては儚く蓋する時ハ元も亦
そふ不濟の時を越通詰達なること能はれ向ふ心
造りして不向不を不及びたり過るり時ハ能溢して
さむいふに及なり時ハ能く用成るは共不變
も思ふにん終る所謂物として不為不待歎ル
りく^{エキニ}故^{ナク}はかく物ある不^{ナク}能く^{ナク}道して^{ナク}進む此のこ
易日無思無為寂然不動感而遂通於天下之故
此理と知く剣術は道ある者ハ道よりちり
修行日何とて教かく教かくしつて不^{ナク}能^{ナク}云^{ナク}教あるの故
も歎あり教あるは教かく一教かくふたもと^{ナク}對^{ナク}結^{ナク}の名

也陰陽水火の類は^{ナク}一^{ナク}九^{ナク}形^{ナク}象^{ナク}あるものハ^{ナク}あり
對^{ナク}はるものあつて然心も象なりけしハ對^{ナク}はるものあり
對するものなり此の時を角よのれ一^{ナク}是^{ナク}を^{ナク}歎^{ナク}もかく我も
有り^{ナク}云^{ナク}物と象と共^{ナク}不^{ナク}志^{ナク}き^{ナク}く^{ナク}潭^{ナク}然^{ナク}として^{ナク}筆^{ナク}
なる時ハ知して一^{ナク}之^{ナク}欲^{ナク}の^{ナク}形^{ナク}と^{ナク}や^{ナク}も^{ナク}して^{ナク}も^{ナク}教^{ナク}も^{ナク}志^{ナク}
ら^{ナク}不^{ナク}知^{ナク}る^{ナク}あ^{ナク}つ^{ナク}此^{ナク}の^{ナク}念^{ナク}も^{ナク}く^{ナク}感^{ナク}の^{ナク}も^{ナク}く^{ナク}動^{ナク}く^{ナク}の^{ナク}
心^{ナク}潭^{ナク}然^{ナク}として^{ナク}筆^{ナク}なり^{ナク}時^{ナク}ハ^{ナク}世^{ナク}界^{ナク}ハ^{ナク}我^{ナク}が^{ナク}世^{ナク}界^{ナク}なり
是^{ナク}れ^{ナク}好^{ナク}思^{ナク}執^{ナク}滯^{ナク}あり^{ナク}の^{ナク}初^{ナク}之^{ナク}皆^{ナク}我^{ナク}の^{ナク}心^{ナク}歩^{ナク}り^{ナク}苦^{ナク}樂^{ナク}以^{ナク}失^{ナク}
の^{ナク}境^{ナク}思^{ナク}を^{ナク}あ^{ナク}す^{ナク}天^{ナク}地^{ナク}廣^{ナク}く^{ナク}して^{ナク}も^{ナク}我^{ナク}の^{ナク}心^{ナク}す^{ナク}り^{ナク}ハ^{ナク}ハ
求^{ナク}じ^{ナク}つ^{ナク}ま^{ナク}の^{ナク}か^{ナク}し^{ナク}古^{ナク}人^{ナク}日^{ナク}眼^{ナク}裏^{ナク}有^{ナク}塵^{ナク}三^{ナク}界^{ナク}空^{ナク}心^{ナク}頭^{ナク}
無^{ナク}事^{ナク}一^{ナク}生^{ナク}寬^{ナク}眼^{ナク}中^{ナク}と^{ナク}づ^{ナク}ふ^{ナク}瘡^{ナク}の^{ナク}つ^{ナク}時^{ナク}を^{ナク}眼^{ナク}ひ^{ナク}く^{ナク}
半^{ナク}能^{ナク}り^{ナク}元^{ナク}且^{ナク}もの^{ナク}か^{ナク}く^{ナク}して^{ナク}ぬ^{ナク}ら^{ナク}なる^{ナク}可^{ナク}く^{ナク}物^{ナク}を^{ナク}合^{ナク}る

故小がれ〜此らのまゝなり 又曰子方人の欲の
 中ふく〜以飛ハ微塵よりなる共い心ハ我ハ物あり大
 能〜い〜も是といふも〜も終る孔子曰西史
 不可奪志〜吾達ハ時ハ悲心却る欲の物〜の我〜
 而終〜此ハ只相返〜我小承〜師を主事と
 侍人〜印以暖〜其有失以終〜我小あり
 先と自ぬ〜心持心〜教非別格も〜
 一教とそむ〜はあり〜師と侍と終〜
 といふあり只将学の〜小あり〜聖人の心法より藝術
 乃末又此のま〜自ぬ乃取を〜我以心持心なり教
 非別格也教〜いふをそのと乃也小〜
 是れ〜終〜石瓜物〜知〜まひら〜師を

是を授ふ〜ある教を〜や〜教とす〜や
 一〜と乃也〜ある物以終〜我〜
 其〜旅〜一〜思惟〜悟〜公喜おの者
 此悟〜あり是〜もわ〜
 一〜あり

莊子の意

林希逸云莊子と云れよのハ別ハ一雙眼と云
くろく一語孟の文字と云ハ書瓜と云く何れ
い層うそ海常ハ一層一層よりも高く理の至
極といひつめく云る自然よとてやじ其意よお
りらく道ハ言治といふのみくハ故よのきり
不不也亦道ハ云る不也のくハりて先
相見の廣スリり不也と結俗の眼リを悟らむ
きめ不常ハ道當の海也一戒ハ人帝ハ玉月
孔子と窮く當世の儒者聖人の真と不意後ハ
て礼樂に我の迹よりく聖人の糟粕と貴して

道と云るをくハ悟り礼樂に我聖人より不也や
がくそんれ極う何と事と論ハ在子実不聖人ハ
不窮もあハる竟寐孔子ハ窮ハる實不竟寐
孔子と貴少今レ儒者の貴ふ不也竟寐孔子の迹
なり其形迹の竟寐孔子ハやうく真の竟寐
孔子とあハるはむく末の天下の篇ハおめて莊
子ハ実の見不と観て一不不坡乃く莊子ハ実よ
孔子と貴ふハ瓜と云う及よ又ハ子孔子と窮りて
とのよ言の記と云る不多り且つ不不ハ其の
海也の賢者の乃く不也ハ其の怪ハ其の戲也
子ハ遠東よハ瓜寓ハ物瓜也く人ハ其ハ入
やうく人の眼と悟らむハ故ててなり佛の方

修は意味なく、思ふは、修は造化の心で、大原の
う、大父母の死を、福福初、静治、跡、大父母、小母を、
今、命、下、一毫も、其、回、小、意、と、容、り、半、知、
先、生、子、ら、之、意、の、後、之、意、と、容、り、何、の、迷、あり、迷
あ、れ、者、い、ろ、ろ、の、知、あり、迷、る、者、れ、は、修、小、意、を、
修、之、は、陸、湯、水、火、の、こ、く、用、と、ろ、ろ、の、意、を、物、以、
害、す、り、何、の、思、う、り、万、物、形、迹、あ、る、物、な、か、の、こ、く、
風、雷、雲、雨、の、れ、又、修、の、元、史、の、又、ろ、ろ、の、れ、あ、れ、
修、の、人、行、感、の、ろ、ろ、の、れ、只、た、を、迹、形、の、修、の、對、か、
若、知、と、い、ひ、ろ、ろ、の、れ、古、今、を、修、の、修、益、を、修、の、修、益、を、
く、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
須、史、と、い、ふ、離、而、之、地、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、

の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
不、知、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
初、感、の、遂、通、於、天、下、の、故、と、い、ふ、修、の、れ、
た、た、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
了、く、遺、を、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
ち、の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
修、の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
ち、の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
真、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
つ、く、修、の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、
修、の、れ、と、い、ふ、修、の、れ、一、の、修、の、れ、一、の、修、の、れ、

のよあふん聖人自社の三徳以人よきしめんがふふ
 其後世のふしけく惜く名と揚げ出しては
 由ふのく礼樂はそ夫徳れり然るはけり制りぬ
 為之中庸曰文武之政布在方策其人存則
 其政舉其人亡則其政息又曰礼儀三百威
 儀三千待其人而後行苟不至德至道不凝
 足よりくくもふそ真とひるも時を礼樂刑政
 糟粕のく存より論びらふの仁政を仁政の途に在
 子と漢ひふはけりそをを扶ひし荒唐の元
 ようつこ其過論以真とせば存子れり方を失
 少のくあふんそをを誤り後世に存子めく又は
 子以改せん只むそ子の入をく知く存子と漢は

不純淨の信を解心術小量ありん
 淨家よ仏と稱し此と寫さるりそは子の氣教
 めのり進く人の知りあそいり一徳のけり

然迦とよつらう者か世よりぬく

おほくれ人証迷をそれりれ

世間のち信知識より有るは此論の糟粕も辭く素想の教
 也と信し真の教也故にふん彼方信知識は信の教也
 かなんてと迷り地獄へ入るい多しよあはとらや
 ぞとて論の教也故にいふいあはとら一人の教也
 たりと信淨くあつて迷て信り射は教也素想はなり世
 界に於て魔なり雲門の棒より教して物も食り
 くとよそをそり自性にてはつて仏の悟り付く

の所ありて教也ハ我々水ものこがら向つてはと水も去ハ
空の如く迷の甚しきことじりて維摩詰河維を何して云
何の所ハ六種の所たなり何の所ハ改て北極の所たなり
阿難経に解と解と心と云らんぬ不教也とも云わ
少くして阿難が後と云らんぬと欲知のこ
或曰庄子ハ諄と云りて云らんぬ氣象の行らるあり其大
不妄なり佛氏ハ空と云らんぬや夫れ造化と云らんぬ知者ハ
庄子ハ空と云らんぬ造化と云らんぬ大宗師ハ空の差ハ空ハ庄
子ハ空門の別流也孔子曰不攻中行而與之必也狂者
乎狂者進取相者有所不為也云らんぬ人の中
ハと云らんぬ用ひき何らんぬ
諄と云らんぬ造化と云らんぬと云らんぬ自ら造つて其言

曉と云らんぬ庄子ハ希世の文章その妙也乃
變化と云らんぬ見難也と云らんぬ予嘗て嘗て此言小解
所と云らんぬ又庄子ハ空と云らんぬ小解せらるるもむらんぬ

莊子大意終

田舎莊子卷附録

目録

聖セ廟イ茶ベ詣ウ
鳩ハ久ト祭ハ明ツ

田舎莊子卷之附録

聖廟祭詠

或人小野聖廟（系苑）之預して曰く君よ
 徳年忠貞の如く我れくんばそとて没家おし
 相都くとも治忘れきあふ立身とてそとて我れく
 常小然といふは侍の形に於て神を以て
 世の所より年を公に治ふありて衆望へん近き
 神はく神よりやせりひそくそとて我れく
 ひろんもの神はくひのりて我れく八紙治をて
 紙が物とて候して治るは肝腹を痛く行り
 水又神の如く白法に候紙は神の子を自ら
 身もく候るそとて曰吾を元神と奉りて事し

多く愈々不潔な事ありて徳なく亦敬り乞ふ
誠の神徳をまらぬくべきが憂に此心と以
神の御心とをまらぬ人必死に神とけず
此者の奇異と云ふより天の御心者一向小令
んと敬し物と爲し天の御心者一向小令
知くされ凡俗をまらぬ人の御心の御法
すよ今この時と云ふかたは名は知る事
々者人少少中へうく西く不為り此や
此忠誠云々と感動するもの神徳云々不
何ぞ死にゆく候と云ふ事一室とあり
新くあきても候と云ふ事一室とあり

寺進はれはれと云ふ事一室とあり
ひとらうと云ふ事一室とあり

仲秋の詩よ
去羊今夜侍清涼
恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香

忠誠と云ふ事一室とあり
侍と云ふ事一室とあり
云々と云ふ事一室とあり
そのと云ふ事一室とあり
一室と云ふ事一室とあり
一室と云ふ事一室とあり

字目案ニ
高言
四討
恩賜
去羊
忠誠

年全無以成也、四年、病死、一回、九子、三子、の事也、
法皇殿、雷の降、その、八、在、長、八、年、庚寅、九、成、之、夏、云
霧、一、り、之、成、も、二十、八、子、め、一、念、の、思、鬼、何、の、降、
ひ、ま、く、二十、八、年、に、久、く、ま、と、降、ん、や、一、流、者、に、流、り、
時、年、八、十、年、以、前、く、病、死、せ、り、又、八、十、以、前、天、皇、
母、御、過、と、悔、か、ひ、く、
後、云、
正、二、位、と、賜、り、行、の、志、と、治、し、て、禁、中、
業、り、と、か、く、ひ、や、又、法、貫、帝、也、と、教、む、と、あ、
ら、り、の、く、八、位、等、と、名、を、
何、ぞ、禁、中、と、
の、成、り、其、氣、教、ず、れ、や、
此、人、性、云、天、地、と、
雷、り、れ、を、
夫、風、雷、雨、八、陰、陽、
の、成、り、其、氣、教、ず、れ、や、
此、人、性、云、天、地、と、
雷、り、れ、を、

七、
山、
と、
天、下、の、人、性、
此、人、性、云、
天、地、の、氣、と、
所、
正、月、
一、
夏、大、旱、
保、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
一百、
一百一、
一百二、
一百三、
一百四、
一百五、
一百六、
一百七、
一百八、
一百九、
二百、
二百一、
二百二、
二百三、
二百四、
二百五、
二百六、
二百七、
二百八、
二百九、
三百、
三百一、
三百二、
三百三、
三百四、
三百五、
三百六、
三百七、
三百八、
三百九、
四百、
四百一、
四百二、
四百三、
四百四、
四百五、
四百六、
四百七、
四百八、
四百九、
五百、
五百一、
五百二、
五百三、
五百四、
五百五、
五百六、
五百七、
五百八、
五百九、
六百、
六百一、
六百二、
六百三、
六百四、
六百五、
六百六、
六百七、
六百八、
六百九、
七百、
七百一、
七百二、
七百三、
七百四、
七百五、
七百六、
七百七、
七百八、
七百九、
八百、
八百一、
八百二、
八百三、
八百四、
八百五、
八百六、
八百七、
八百八、
八百九、
九百、
九百一、
九百二、
九百三、
九百四、
九百五、
九百六、
九百七、
九百八、
九百九、
一千、
一千一、
一千二、
一千三、
一千四、
一千五、
一千六、
一千七、
一千八、
一千九、
二千、
二千一、
二千二、
二千三、
二千四、
二千五、
二千六、
二千七、
二千八、
二千九、
三千、
三千一、
三千二、
三千三、
三千四、
三千五、
三千六、
三千七、
三千八、
三千九、
四千、
四千一、
四千二、
四千三、
四千四、
四千五、
四千六、
四千七、
四千八、
四千九、
五千、
五千一、
五千二、
五千三、
五千四、
五千五、
五千六、
五千七、
五千八、
五千九、
六千、
六千一、
六千二、
六千三、
六千四、
六千五、
六千六、
六千七、
六千八、
六千九、
七千、
七千一、
七千二、
七千三、
七千四、
七千五、
七千六、
七千七、
七千八、
七千九、
八千、
八千一、
八千二、
八千三、
八千四、
八千五、
八千六、
八千七、
八千八、
八千九、
九千、
九千一、
九千二、
九千三、
九千四、
九千五、
九千六、
九千七、
九千八、
九千九、
一萬、
一萬一、
一萬二、
一萬三、
一萬四、
一萬五、
一萬六、
一萬七、
一萬八、
一萬九、
二萬、
二萬一、
二萬二、
二萬三、
二萬四、
二萬五、
二萬六、
二萬七、
二萬八、
二萬九、
三萬、
三萬一、
三萬二、
三萬三、
三萬四、
三萬五、
三萬六、
三萬七、
三萬八、
三萬九、
四萬、
四萬一、
四萬二、
四萬三、
四萬四、
四萬五、
四萬六、
四萬七、
四萬八、
四萬九、
五萬、
五萬一、
五萬二、
五萬三、
五萬四、
五萬五、
五萬六、
五萬七、
五萬八、
五萬九、
六萬、
六萬一、
六萬二、
六萬三、
六萬四、
六萬五、
六萬六、
六萬七、
六萬八、
六萬九、
七萬、
七萬一、
七萬二、
七萬三、
七萬四、
七萬五、
七萬六、
七萬七、
七萬八、
七萬九、
八萬、
八萬一、
八萬二、
八萬三、
八萬四、
八萬五、
八萬六、
八萬七、
八萬八、
八萬九、
九萬、
九萬一、
九萬二、
九萬三、
九萬四、
九萬五、
九萬六、
九萬七、
九萬八、
九萬九、
十萬

長し以め管ふた途の靈がと燒け正二位と賜ふ
御も人位は慢とてくまじせんのみ天災心延
七年又早懸一國七年大水同八年庚寅の
年雷清涼殿に降是天下の人情の安むせざる
ありて天地と感動をふりて 夏公の靈與
りけりゆふりてあらん天下の人情をれくせれ
く安むせり況や内年と要と與とさる族はり
く其要氣と云天の要氣とてしん心瓜擊心氣を
半取しとよ依く人情奇怪と云く無く也
異中ん傳は載る所の伯有の厲の類にあは伯
有は凡人あり靈とて日或同く流るる人
又叡山の言は法師の坊(夏公れ冥よりりひれ

梵天帝釈のゆきとてうきとて極中ふくく仇と破
せん欲の多るは法に流るるかといたり
善意不昔若念く 柘栲と執く 果念(善
たて心けりて善と能ありと善と念浮水の
不とい消きり其善とれ獲獲今示残るるなり
と云はくうき善と云はれ奇妙とてくらんた
後人の所傳也也 一 法師の心動ゆゆゆ
くは若實とらぬの者ありきといはくは
天狗のの妖怪又善意心魔とて心魔は
りて禪家の書とて得く載はれて慢心の傍と
狐狸天狗の氣なる家ひぬくき善と云は
よ天狗くめりといはくはくうき人則と縁ありき

りて法乃得るは妙のよのふもくも人のなほ母て
如し半ありたうく取くそ法と語ひをすし
人よ法半ありては紙が法に名詞よ其法あり
の書とと秘法とく記とするが心は法口
まくおふまといのうかして法とするは貴き
信の天得くなりきる半古書よおはく記す又
禅保は坐禅の前く希異なる半と記すは
皆然心の魔へおはるも其法ありて人の心は
法をすといふ法皆希異なるも法なりたふ志あり
信ありは希異なる半ありて紙が不徳なる半紙
取く実といひは法をくく人よ法ありてまの
まの信く人法取く半ありて信はかたき希異

ありては法乃得るは妙のよのふもくも人のなほ母て
如し半ありたうく取くそ法と語ひをすし
人よ法半ありては紙が法に名詞よ其法あり
の書とと秘法とく記とするが心は法口
まくおふまといのうかして法とするは貴き
信の天得くなりきる半古書よおはく記す又
禅保は坐禅の前く希異なる半と記すは
皆然心の魔へおはるも其法ありて人の心は
法をすといふ法皆希異なるも法なりたふ志あり
信ありは希異なる半ありて紙が不徳なる半紙
取く実といひは法をくく人よ法ありてまの
まの信く人法取く半ありて信はかたき希異
ありては法乃得るは妙のよのふもくも人のなほ母て
如し半ありたうく取くそ法と語ひをすし
人よ法半ありては紙が法に名詞よ其法あり
の書とと秘法とく記とするが心は法口
まくおふまといのうかして法とするは貴き
信の天得くなりきる半古書よおはく記す又
禅保は坐禅の前く希異なる半と記すは
皆然心の魔へおはるも其法ありて人の心は
法をすといふ法皆希異なるも法なりたふ志あり
信ありは希異なる半ありて紙が不徳なる半紙
取く実といひは法をくく人よ法ありてまの
まの信く人法取く半ありて信はかたき希異

と斬るゝつゝもつゝ其魔なりと云ふは勿く強味れ
俗を迷く我心よれん或を奇異の中小書して
真小魔界よ入る魔ハ迷心たりせんと云ふは
行法の奇特也と云ひく慢心生る天狗なる
半もろく正法小奇特とい空海が如く云ふも
空海を大意ハ知りては我を奇特と云ふと
人と教く又後人附令く空海と云ふ下小海しりて
朱雀院天慶六年小寺の傍日藏といふ者死す
十三日小く夜に朝延小奏して云吾世同我
死しく地獄入る地獄の中にて是喜帝と云ふ
有りてり帝我と云ふく宣く彼天神遊心と云
日本に崇りてありて日向く仁寺以境有信以害ん

御も其竹を宿世の音のふらく大威徳天神如
以小竹造る所の罪故皆を是瓜交く是まろく
我昔以交る半云量たりゆふ小にり帝奏
て一百万の率都染と云我々苦患と equal 勅使い
かりてゆふ半以る此の鬼と云是帝と云右より月
より地獄へはとくゆきなく滅しやにやら天子故
の地獄に毒言と信りて心扉一百万率如染瓜造
立し詩寺小信を法華經と持讀せしゆ日花
が妖言せしは人書しあつて句折たりて是喜帝
の御海以寫し樹率の呵責する瓜瓜双紙の法も
去ありて人形も有り怪なりあやほりあは法
半千載れ後しつゝも見ら小思てあつてゆき

りなるは法陣の妖言ありつゝぬなるは
も日荒らざれば者いとも一人の法世のきあふ朝
廷と歎くものありし思と未嘗と始てくはの思
人としてかあゝく徳歎の業とあゝしむる天
爵ゆらん西の法者なりと嗚呼天下文明の時出で
妖言言ひ出せしは東の法も行はるべき
半の法念なる味と紙因り天子の御安を
天空の法法流布のきあふとくのみくあふ
信ふまゝしむる則ち信せし人今年目まじし何れ
あふと法しむる小書に記する年人の心ありし
先とるるは思んや其不ハ未嘗院の御迷心と
信信と斬罪とるるより始つゝ父祖の法祖

法宗の法ありし法とて思ふ法とて思ふ
御とあゝく聖天子といはれし徳ありし徳と
そゝぬ法世の妖言ありし法とて思ふ法とて思ふ
當社の御神の妖言ありし法とて思ふ法とて思ふ
程忠法の神徳といふ法とて思ふ法とて思ふ
つふ事ありし法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
今もあゝるひの法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
立るる末法も同じく法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
てや末法も同じく法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
書とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
足る人の天狗ふりし法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ
と法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ法とて思ふ

術を以てして仙術者あり既小仙なる時を換骨
の術なくと氣行せし不爰化するやさしきり体は氣より
依て動る氣を心の向ふ所なるが故に心を変すれば
氣は変じ氣は變すれば行を變する乃理もあざし御ん
言慢編氣の精靈を撰ひ甚しく天狗なる事あり
御下記をいひててそを海法師と云ふる者と皆お伏し
滑ればせいざらるもの其途はたつとある者あり又
何と云ふか今法はよある所の王の鼻と云ふもの別也
神代の穂田氏の命の能く此命諸神のえに神とい
ふ事よくわたり多しく畧と云ふ事よく又例のほ者附
會して此神守護の悪魔と云ふ事よく又例のほ者附
は面と天狗の面と混じりたる事よく又余と云ふ事よく

壺之榮明

維く壺と稱ふ維く壺と稱ふ維く壺と稱ふ維く壺と稱ふ
物音をてて人衆とて之くハ蓋ふく人よわがたりうん
あつたことこれ一人衆にはちぬ家なく未のふ出で神と
承じを後不用とて之くやと云はるはけふたまされて
打あつたことこれ一人衆にはちぬ家なく未のふ出で神と
之何の用心と云へく人衆に友をを悪くわけてサレ
度と云ふそハ庭木の枝もともう庭をけりてさして
てつたつたことこれ誰と云ふかれびせめて小声なるた
吐くことこれをぬたすけとのふに生きたるまはるまは
りぬるといふ福云はれ物と云ふことと勇と云へぬ不
どの事と云へく人の言と云へると云はるまはるまはるま

おれ一人が身れ先去やその事ハ我知るべし然先山小入
れさく一人のゆゑのさう大敵の座小あつたあまと金
をわかの知恵之付方小居るれがて金銀母れが道
所々にいたの道之あつて死ぬさう膠漆したる居
まじかぬまてせささうりて人のつらふなる者や
合別之是也いせぬよの道化の命之生死ハ形ある物の
常なり人ありてれは我亦送化の中れ一物
なり天何ぞ然人せとせし我の福とせんや天祥の家を
病

心が糸流の道よりうひりな

是れは後接の沖舟をわし世命とあつて人命も
さく生流にさくたといふ巧とそし用心ひるは小
し

時をもたれ心なりかの心腹もあつたれはさうさく
スはかゝるをさるぬ小常小はかくして人もあつたをさ
る也也それわし愚痴をそし常小物とあつて生ま
死うらはあや其若くことせむよりハ生れと命ははせ
世方あり廣く死ありびあつた思ひて生運ありと死ありにむしは運
命ありのゆゑれと思ひ我を世と思ふなりとすあり
むしは運命しておもひする人あり何れ祥符にて云
くろさる方を武とくは物と膠漆と生死と茶の
味をそしは死れは生れを方一人それ他人すだれて力と天
牛よふかや物おもひく早死れぬといやがる心をぬる
物之れを嫌ありとさうさうさうといふ死ありてまを
男也ありまひやうとさう思ありて物おもひする家ハ生

丁未夏

水園 七 漢 子



享保十二年丁未季夏穀旦

文にひのえぬらうーほのふほのみのみらうーむらふ

中村由布直道藏本

